

大江山地区の子育て教育運動の課題

— 人を耕しつづける大ロマンを地域で —

高 橋 武 昌



特集 地域と教育力

1 子どもの文化教育と様々な人たちとの出会い

私たちの地域での子育て教育運動は、様々な人達との出会いの連続でした。一九七一年冬大江山農協の青年部だよりに高橋キミ子は大江山の子どもをめぐる地域の未来を次ぎのように書いています。

「私たちはついに、この大江山に根づきここで子育てをするようになりました。子ども達が育つすばらしい自然の残された環境ではありますが、しかし、子供の心はどうなっているのでしょうか。テレビに毒され、簡単に他人をバカにする子供の心が痛ましいのです。

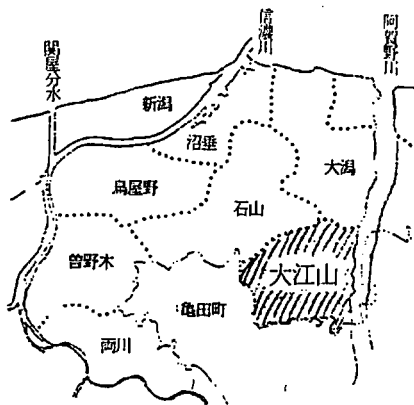
この大江山にほんとうに生まれてよかったという子どもたちのために私たちは何かすることがあるはずですよ。何といても、子供達が文化的に高まり、どこの親たちも自分の子どもに誇りを持てる環境をつくらなければならないのです。学校や農協や町内が、子供に最高の文化を準備し、仲まづくりをすすめることは決して夢ではないのです……」と。

一九七五年より八〇年（松葉保育園設立運動がはじまるまで）に至る時期に、地域の全体像をつかむことは、出来ませんでした。地域の子供、青年とその足もとのくらしがどうなっているかも、いつも部分的なとらえ方しか出来ず、その課題を明らかにすることも不十分でした。教育や子ども、親のことを科学的に分析したり原則を明らかにするのはいつ

も新潟県民間教育研究協議会に結集する先生方でした。木村隆利先生、吉田三男先生を始めとする多くの先生方との出会いが運動の方向をさし示してくれました。又、新潟市民間教育研究協議会では、毎月例会を企画し三〇名ほどの先生方が結集していたようです。小林進一郎、飯田洋子、白島達彦、足立 豊などの先生方が活躍していたのが印象的でした。教育基本法・高校増設運動・集団づくり、読書運動などの学習は、大江山地区の教育懇談会を始めとする様々の仕事や丸山小学校の教育実践の大きなはげましと教訓となりました。

又、地域においては、文庫（松山宇宙文庫）を開き子どもの遊び場を提供する仕事は楽しく、子どものみならずそのまわりの親たちをつなげていったようにも思います。そして、子供の荒廃は学校の教育と地域のかかわりを無理なくつなげるものになっていました。その子どもたちの心と体の荒廃とは、かつて想像も出来なかった高度経済成長期の、深く地域の中に進行する地域破壊の姿と一致するのです。地区内の江口地内に一九六六年食品団地が造成されました。これは、現在は七八〇人の従業員、出荷額約一〇〇億円、といわれています。その従業員の七割は大江山の主婦であるのです。大江山地区一四〇〇戸（人口六〇〇）のうちから五〇〇人もの人たちが今までの就労形態をかえ生活のリズムをかえ、生産より消費を主体にした家庭生活は、子ども

に変化をもたらさないわけはありません。高度経済成長のもとで大江山地区の専業農家は一九六〇年から七〇年までの一〇年間に、二八九戸から六四戸に激減しました。一九六〇年の農業基本法制定を背景に、大江山地区では、極度の賃労働者化と兼業化が進行し、戦前からの伝統を持つ野菜づくりは衰退し、家畜はほとんど姿をけしいたのです。一九七〇年は第一次減反がはじまり、休耕、農地移動は進み、宅地化がすすみ、地域の大変ぼうがおこったのです。そういう中で、文化活動を中心とした子育て教育運



年 次	世帯数	計	男	女
1945年 (20)	1,045	6,979	3,234	3,745
1950年 (25)	1,039	7,049	3,441	3,608
1955年 (30)	1,047	6,785	3,395	3,590
1960年 (35)	1,078	6,656	3,252	3,404
1965年 (40)	1,122	6,342	3,074	3,268
1975年 (50)	1,319	6,236	3,026	3,210
1985年 (60)	1,457	6,432	1,104	3,328

年 次	総 数	専 業	兼 業		
			総 数	第1種兼業	第2種兼業
昭和25年 (1950)	718	491	227	150	77
32 (1957)	732	389	343	289	54
35 (1960)	704	289	415	209	206
40 (1965)	681	121	560	359	201
45 (1965)	633	64	569	336	233
50 (1975)	579	28	551	263	288
55 (1980)	532	42	490	199	291
60 (1985)	511	47	464	188	276

動の小さなころみは、地域の父母に具体的に新鮮にうつりました。生活形態の変化やそれによる生活リズムの変化は人間を分散する方向にむかわせました。親たちが集り子どもとの現状と未来を語ることは心おどることでした。

2 地域の学校の役割

次に子どもの荒廃は学校においても教育の課題になりうる問題でした。忘れものの増可、朝食ぬきの子の増加、授業に集中しない姿、家庭内外の窃盗、人とかかわりのまらずさ、他人の弱点をのしったりバカにする（一九七四年年度末教育計画のまとめ）等が、教育の課題とならざるをえなかったのです。一九七五年度の教育計画づくりの検討は「世間のわかるひとりだちの出来る子にしたい」というテーマでした。世間がわかる子とは、どこの町内の子供とでもはずかしがらずに交流したり、遊びの技を持つ子のことです。ひとりだちの出来る子とは、自分の頭で考え、自立した行動の出来る自覚的な子のことです。しかし、丸山小学校の教職員集団は、子どもが悪いのは、「この地域の親がおくれている、働くばかりが能でない」という考えから脱皮していませんでした。ですから、いつも子どもに説教することや、意志のよわさを嘆く姿が多かったのです。しかし、私たちには、そうは見えなかったのです。

文庫に来る子が生き生きした眼をし、遊び好きなことはわかっていました。又、丸山子どもの文化をすすめる会の実践は、子どもに心をひらく大人、地域の人たちを増やしつづけ、親はだめだとは言いきれないと教えていました。一九七五年度の教育計画生活指導の活動内容に、生活実態調査が位置づけられています。そのひとつは、「どうも子どもの生活のくずれは朝にあるのではないか」ということになり観念で子どもをみて来た教師集団にショックとなった科学的な教育のひとつでした。

※朝の子どもの生活のようす 起床から食事までの時間

新潟		時間	人数	時間	人数
五時〇五分起床	起床してから 家を出るまで 一番長い時間	五分	三	四五	五
		一〇	九	五〇	七
		一五	一六	五五	二
		二〇	二一	六〇	四
		二五	二五	七〇	一
		三〇	一四	八〇	二
		三五	一五	九五	二
		四〇	九	一〇五	一
	起床してから 家を出るまで 一番短い時間				

神奈川	一時間五五分 六時〇〇分起床 一時間五〇分	四〇分
山梨	五時一五分起床 二時間三五分	三〇分
東京	五時四五分起床 二時間一〇分	二五分

早おき型の子とおそおき型の子の生活の比較	おそくおきる子% (七時すぎ)	はやくおきる子% (六時半まえ)
人にいわれないとおきられない	79%	25%
朝の手伝いをしない	53%	25%
朝、歯をみがく	48%	91%
きちんと朝食をとる	57%	94%
夜九時以後のテレビをみない	19%	28%
家での学習が一時間以上	8%	30%

一〇時すぎにねる	35%	2%
ふとんの中に入ってあっといいう間にねむれる	11%	38%
ねる前に歯をみがく	49%	54%
前日、学校の準備をする	68%	51%

一九七五年一〇月子どものしあわせも調査の内容をとりあげ、生活リズムの問題がわかりやすく整理され、学校でも学習する資料となりました。

朝の生活の調査でわかったこと

(1) 全般に、朝おきてから家を出るまでの時間に余裕がないことそのためめざめも充分でなく食欲もないまま流しこんで来る子が多い

(2) 何度もおこされないとおきられない子が多くなり、他律的な生活がふえている(前日の就寝がおそくなっていて夜型人間になった)

(3) 朝目的を持った行動が出来ない(これは、親のかかわりのまずさと、親の目のくれ方に大きく影響されているとくにいちごもぎの時期になると)。

(4) 朝のテレビを見ている子が52%もあった(食事を

朝の子どもの生活のようす（提出用紙）

2年2組 男・女 きのうねた時刻（10：00）

今井みしま きょうおきた時刻（7：00）

時刻	子どものしたこと・そのようすをなるべくくわしく
5：30	(10時にベッドに入ったが なかなかむれずねむった時 刻は10時15分位でした。)
5：40	
6：40	
6：50	「起きれっ」と言う。 この間6回催促する。
7：00	やっと起きる、トイレへ。 タンスから洋服を出し着換えを始める。 生ゴミを出しに行く。
7：10	今日はなかなか戻ってこない。となりの坊やと遊んでいる様子。 やっと戻り、玄関掃除を始める。顔を洗う。
7：20	「早くごはんを食べれ」と言われたら、今日は食べたくないと 言う。「少しいいから食べろ」とやっと言いかけ食べ始める。 ごはん1ぜん、お汁1杯、のり、ちくわの油炒め。
7：30	
7：40	やっと食べ終り学校の支度をする。鉛筆を削ったり、早く早く と何度も言われる。 「行って来ます」と出掛けようとしたが「忘れものはないか、 名札は」と言われて、名札がついていないのに気付き、つけて 出る。 出掛けたのは7：43分

しながら見る、おきてすぐスイッチを入れる等も特徴的です。

等です。

その調査の内容は1、朝のめざめ方 2、起床時間 3、朝の手伝い 4、はみがき、5、排便 6、排便のしかた 7、朝食 8、朝のテレビ 9、学校は楽しみか 10、通学班 11、一限の集中度 12、授業 13、一日の生活(学校) 14、友だち 15、買いぐい 16、家にかえて 17、塾 18、夕方の手伝い 19、食前の手伝い 20、夕食のあいさつ 21、夕食の仕方 22、夕食時のテレビ 23、テレビの視聴時間 24、九時以後のテレビ 25、宿題以外の勉強 26、就寝時間 27、ねつき方 28、夜のはみがき 29、ふろ 30、学校の準備

その他多岐にわたりますが、学年ごとの分析、早おき型とおそおき型の子の生活の比較、テレビ番組の内容分析なども加えていきます。

これをどのように、教育方針化としていったかは、枚数を必要としますので簡単に述べます。

生活実態調査であきらかになったことの例

(1) 朝から生活リズムのみだれが大変で、そのことが学校生活に影響している(七時すぎの起床が七一名、朝排便してこない子が低学年に多い他)。

(2) テレビの視聴時間が長く他の活動を阻害している。ま

た、言語生活が奇妙になっている……と八項目が確認されました。

具体的な方針は、毎月の目標として実践されることにも

なりました。そのなかには、「生活リズムの乱れは、知的活動(授業)に悪影響を与えているので、次の点からなおす」

(1) 朝の仕事の励行 (2) 排便の大切さを教える (3) 前からついている悪い習慣を家ぐるみでなおす(例食事中のテレビは消す) (4) こどものことばがおかしいので、じっくり日記授業をつよめてすすめる……等々でした。

教職員集団は、一連の実践の中から、学校から見た地域

の子供の中にある課題を選びだし、そのことから統一と合意が出来るようになり、学校の教育活動全体に活気がみえて来たのです。実は、この学校ぐるみの調査運動は、一九七八年からの大江山地区青少年育成協議会を中心とした、父

母ぐるみの調査運動のひな型であり、基盤となっています。また、学校教育が、地域に根ざす学校づくりを次の点で

進めていったのです。

(ア) 子どもをていねいに見ることを大切にする教師はその専門性を生かし子どもの問題を生活と授業の中からみつけ

父母、住民に提起していく(生活実態調査運動の位置づけ)。

(イ) 学校の教育過程を子どもの生きる力をさし示す方向で

組みかえを始めた

・ 社会科高学年一二項目の地域学習内容

・国語：全校日記指導・文集づくり

・児童の自治を育てる（全校行事のくみかえ、この実践は『教育情報』特別号地域民教新潟集会の報告にのせた）

（ウ）PTAで教育運動をすすめる

青少年育成協の調査運動の中核になる地域の補導会連絡会を毎月開催・地域豆字校の推進・「子どもの文化を考える」「非行について」等のパネルディスカッション・育成協を中心とした映画のとりくみ

3 子供、父母、住民と様々な運動の出会い

大江山の地域づくり運動の中でも、その眼となりエネルギーを集約し次の運動の起爆力になったのは、一九七六年（昭和五一年）の松葉保育園づくり運動だと思います。同時に亀田郷全体は常に、住民の自治をどうはげまし運動を典型化していくか模索していました。いわゆる地域づくりをトーナメント方式（地域を領域でわけて運動していく）ではなくリーグ戦（地域のいろいろな活動が入りみだれて相互作用をおこす）の実験がおこなわれていました。その状況の中から教訓を考えたいと思います。

（ア）明日の亀田郷をきずく会

事務局は亀田郷地域センター（亀田郷土地改良区）にあります。会長は臼井晋先生（新大経済学部）で、二九名の役員と八名の事務局員で構成しています。亀田郷（大江山地区は

勿論入る）新潟市、亀田町、横越村の行政区にまたがる一八万人の人口を擁する混住地域社会です。そこでは、消費者と生産者が混住し、水を使い流す人、そしてその水を利用する生産者というようにお互いが切っても切れない関係を結んでいることを認めあいながら生活をつくりかえていく訓練をする学習体です。一九七八年より明日の亀田郷を考える集会、教育を考える集会、畑作農業を考える集会、行革を考える集会などを開き交流を深めて来しました。

医療、環境、教育、農業等の面からの運動交流は、大江山においても地域の自治会（連合会も含め）土地改良区役員、農協が住民の運動と有機的にかかわり、その本来の役割りがリーグ戦的なお互いのかかわりを持ちながら住民の自治を支えていくという方向を地域住民にさししめました。今日の地域の全ての団体が運動に名をつらね、名目だけでなく実質的な力を発揮してくれる状況をつくり出してこれた実践でした。

（イ）大江山青少年育成協議会

この頃の内容は別レポートで述べられていますので重複しないようにしますが、本来官制のともすれば形式的なトーナメント式分野的な活動で終わるところ、子ども、青年の発達を地域住民の力ではげまし、培っていかうという一つのロマンでもありました。子どもの生活実態調査運動については、父母自らの手で子どもの生活を見つめ自分の生活

と現在の地域の状況を分析し、子育て運動の方向づけをしていったわけです。様々な人たちが交流しあう行事を考えていったわけですが、その一つに、地区内一周駅伝マラソンがあります。

地域の全ての人たちがまざりあい自分の今まで生きてきた守備範囲をこえて、まじりあう場として大変有効だったわけです。秋田県象潟地区の地域づくりに学んだのです。小五、六年生、中学一〜三年生、高校生、成人のたての一二名が一部落から出るようになります。小部落は混成になりますが大部落は二〜三チーム出場できます。部落（地域）の大人は、子どもをいつから集め練習に入るか、どのコースで練習するか、だれが指導にあたるか当日のおやつとの係から伴走の係までの分担などを一カ月にわたって実践するのです。又、学校は、当日までの全体準備をすすめます。他団体は全て協力態勢に入ります。賞品を寄付するところ、交通安全をすすめる団体……と様々です。当日は、早朝部落の人たち総出の中で自分たちの代表が走るのです。応援にも熱が入りますし、どの層の人たちも参加できたのしい時間です。地域づくりの一視点からみると大変効果的な行事です。いつも全体が、何らかの形で子供、青年にかかわるとともに、大人自らも家と職場の往復であったのが、自分の子と自分の根づいている地域を複眼的に見ることが出来るのです。同時に今までにない人間的な横のつながりを

もつことができ、それが、人間的感動を生みだしていくのです。

育成協が、講演会や様々な集会をして映画などをやっていく意味は、生産、くらしの破壊状況をきちんと子供にあらわれる問題としてとらえていっていることと、よりよい文化を地域にと願ってきたのです。一団体、一学校の努力、奮闘では、展望は切り開けないと実感しているからです。

(ウ) 大江山農協

高度経済成長は大江山の地域と農業をかつてない規模と深さで破壊してきました。その中で大江山農協は、農業で生きたい人が農業で生活できるようにするために（大江山型複合経営）を確立するための事業と運営の組み立ての土台にするに至っています。しかし、ポスト三期、金融の自由化、農協の合併等の大きな流れの中で、本来の生活協同組合として果すべき仕事が期待されています。子育て教育の問題も切りはなすことの出来ない組合員の要求です。その中で一九八六年一月には、地域の各層によびかけ、子供と人間の生き方を問う映画上映運動を展開しました。「きみのふるさとに太陽がのぼった」という映画です。七〇〇名の小中高生と大人がみています。人間がどういう道すじで発達していくかわかりやすい映画で感動をよびました。育成協を主力に、農協が位置づけられ、また新しい運動を地域ぐ

る形で展開できるところにきました。

(エ) 大江山中学校を中心とする学校の実践

市教組の運動方針にも、学校づくりを教育運動の大方針にしています。大江山地区のとなりの石山地区の東石山中学校では、半戸義雄先生を始めとする教師集団が、労働体験学習にとりこんで来ました。昨年は、大江山地区に入りたいとの要請がありました。市教組も、大江山農協も応援し、二〇戸の農家に労働体験学習に入りました。豚舎のそうじ、ブドウの手入れ、イモほりと様々でした。地域の人たちは、大江山の子どもにもこんな体験をさせてやりたいと声を出しはじめました。

大江山中学校も、校長先生を先頭に、春から労働体験を課題にして「地域の生産に学ぶ」学習を全校でとりこんで来ました。苺づくりについての講話、大江山農協の仕事の話などを聞いて学び、夏休みには全校の体験学習がとり入れられました。

- ・生まれ育った地で体験を通して地域の理解を深める

- ・体験を通して働くことの大切さを理解し、地域の一員としての連帯感、所属感を深める……という目標をかかげ全校生徒三〇〇名全員が何らかの労働体験をし、作文に綴っています。「米作り」「家畜の世話」「乳牛の世話と牛乳工場見学」「子守をして」「亀田甚句の太鼓練習」「レンコン掘り」「養鶏場の体験」「魚市場へ行って」「わらじづくり」「梅

干づくりの仕事」「保育園での実習」「食品団地の冷蔵庫清掃」「主婦一日体験」とほんとうにバラエティにとんでいます。

「今まで野菜を何も考えずに農家の人の苦勞も知らずただ『体にいいから』ということだけで食べていました。でも農家の人といっしょに仕事をやってみて一つの野菜をつくるのにも大変な苦勞がいるもんだなあと思いました。たとえば、ほうれん草などは一日収穫がおくれると、もうおいしさがちがうことがわかりました。」(畑仕事の体験より)等の文を読むと教育という仕事が大きく子供の中に刻み込まれる思いがします。りっぱな学校の方針だと思います。それをはげましつづけ、援助の基盤が今どうしても地域に必要です。丸山小、大淵小も形は変わっていますが労働体験を実践し地域にひろげています。

才亀田おやこ劇場運動、松葉保育園、大江山中学校等のPTAづくり等は別リポートで書きます。

3 孫の代までを展望した地域づくりを

子ども、青年の全面発達を願う地域の運動は、意識的に次の時代を展望する政策、組織を必要とします。今、大江山地区は大企業の低賃金労働力の供給地としていっそう深く組みこまれていくのか、それとも地域と農業とくらしの

民主的再生を協同の力でめざすのかをめぐって岐路に立っているのだと思います。そのことをきちんと視座にすえながら次の時代の展望をしなくてはならないと思っています。大江山地区子育て教育研究集会は、その模索の第一歩でもあります。地域と農業とくらしの民主的再生と、それを阻止し、破壊しようとする勢力のつばぜりあいだと思います。地域運動の政策づくりの出来る集団が形成されつつありますが、当面のことをかかげ歩みはじめています。

・子育て教育実行委員会を存続させ、すべての団体、学校と連帯しながら、対等に運動をすすめていく

・次年度の学習会を準備する（地域大学へ）

・大江山地区の教育力調査を県民教育研究所とともにすすめる、運動のまとめをやる

・農業を中心とした子育て学校（仮）をつくりあげて地域で子ども、青年の学ぶ場所をつくる

・大江山地区の一大イベント（子どもまつりのようなもの）をつくりあげて地域の連帯と文化の伝承をすすめる

・地域新聞を発行し地域のコミュニティセンター的仕事をすすめる等

「大江山地区の教育運動は、有機農業のようなものである。それが土を生かし肥やしていくように、大江山は人を耕しつづけている」と武田宏先生（新潟大学）はいわれました。私たちの地域でのおもいは、孫の代に実証されるもの

と確信しています。人を耕しつづける仕事をはげましてくださっている様々な団体、県民教育研究所、人々の一層の力添えをおねがひしたいものです。福島達夫先生（日本福祉大学）も本誌に私たちの地域づくりについて貴重な助言、示唆を与えてくださっています。

どうぞ熟読いただきたいと思います。

教育シンポジウムと講演の集い

— 学校・父母・地域をつなぐ子育て教育 —

・と き 1987.6.28 (日)

AM10:00~PM4:00

・ところ 長岡市商工会議所

長岡市城内町1丁目

※長岡駅構内右へ徒歩5分以内

(隣に有料駐車場あり)

・講師 村山 士郎 (大東文化大)

— 交渉中 —

主催 にいがた県民教育研究所

TE L 0233-01-2131

發行責任者 白井 隆

